

まちかね Vol.7 ミュージアム

発行 / 2024.3.8

発行者 / 大阪大学総合学術博物館

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町 1-20

博物館ホームページ URL

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp>



令和6年度 適塾特別展示／大阪大学総合学術博物館 第19回特別展
【大阪大学微生物病研究所創立90年・藤野厳九郎生誕150年】

三人の藤野先生、その生涯と交流

— 升八郎と洪庵、厳九郎と魯迅、恒三郎と遼太郎 —

藤野升八郎（1819-82）は、越前国坂井郡本荘村（現・あわら市）の医家に生まれました。京都で小石元瑞に学んだ後、弘化三年（1846）に適塾に入門し、緒方洪庵に師事します。家伝によると、福井藩主松平春嶽から藩医を命じられましたが、病弱なため辞退し、漢籍・蘭籍の涉猟に努めたといいます。洪庵との手紙のやりとりなどから、在村医として地域医療に貢献したことや、洪庵の息子達にも慕われていたことが分かります。

升八郎の三男・厳九郎（1874-1945）は、仙台医学専門学校（東北大学医学部の前身）で教鞭を執っていた時、唯一の中国人留学生としてやってきた周樹人（中国の文豪・魯迅）を熱心に指導したことで知られています。魯迅は、厳九郎を終生尊敬し、自伝的回想記「藤野先生」や、書簡からも厳九郎への思いが滲み出ています。

升八郎の孫で厳九郎の甥にあたる恒三郎（1907-92）は、大阪大学微生物病研究所長（第4代）を務めた細菌学者で、そのもっとも大きな功績は、腸炎ビブリオの発見です。また細菌学だけではなく、医学史研究にも取りくみ、『学悦の人』（1970）、『藤野・日本細菌学史』（1984）など多数の著作を残しています。さらに、恒三郎は、大阪大学における適塾顕彰活動におけるパイオニア的存在でもありました。司馬遼太郎との交流もあり、多彩な活動を続けました。

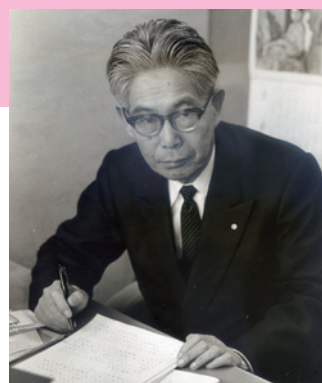
本展では、本学微生物病研究所創立90年・厳九郎生誕150年の節目に当たり藤野家伝来の資料を中心に、三人の藤野先生の系譜を辿り、その生涯と藤野家に流れる適塾の精神に迫ります。

主催：大阪大学ミュージアム・リンクス（大阪大学総合学術博物館、大阪大学適塾記念センター、大阪大学アーカイブズ）、適塾記念会

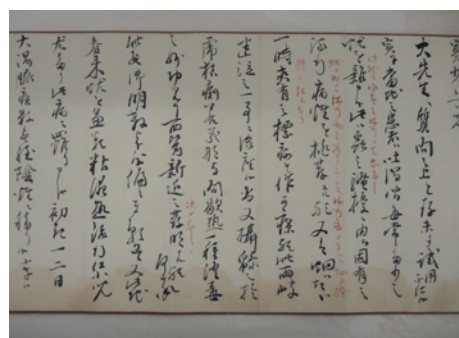
共催：大阪大学微生物病研究所、阪大微生物病研究会、大阪大学大学院人文学研究科



藤野厳九郎肖像（個人提供）



藤野恒三郎肖像（適塾記念センター蔵（藤野家旧蔵））



緒方洪庵宛藤野升八郎書状（適塾記念センター蔵（藤野家旧蔵））

特別協力：福井県

協力：あわら市、あわら市日本中国友好協会、大野市歴史博物館、司馬遼太郎記念館、東北大学史料館、日刊県民福井・中日新聞、福井市立郷土歴史博物館、福井新聞社、福円寺（あわら市）、松江市立鹿島歴史民俗資料館

協賛：豊中市日本中国友好協会

期間：令和6年（2024）年4月

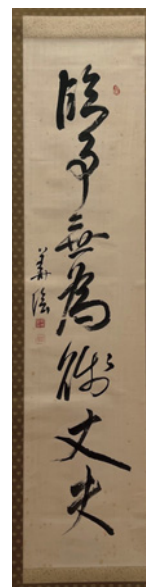
24日（水）～6月22日（土）

※日曜・祝日は休館日

ただし、5月3日は開館

会場：大阪大学総合学術博物館

待兼山修学館 3F 多目的室



洪庵が升八郎に贈った訓戒の書「臨事無為賤丈夫」（適塾記念センター蔵（藤野家旧蔵））

展覧会報告

第25回企画展「ちんどん屋 ―宣伝・広告に活きるハブ（集積／中継／交流）芸能―」

第25回企画展では、「ちんどん屋―宣伝・広告に活きるハブ（集積／中継／交流）芸能―」として、ちんどん屋をテーマにした展覧会を開催しました。ちんどん屋は、宣伝や広告のために、口上や扮装、音楽などを活用して街中を巡ります。展覧会では、ちんどん屋の持つ「わざ」が、先達からの知識や技術を受け継ぎながら、芸のジャンルをも超えて学び継承されていることを紹介しました。また、ちんどん屋が現在でも活躍しており、この先も活動を続けていくであろうということもお見せしました。多様な芸や歴史の積み重ねは、ちんどん屋を中心に据えることでみえてくることがあると考え、ちんどん屋を「ハブ芸能」と名付けました。

また、展覧会ではなかなかお見せしづらい、生の、動くちんどん屋をぜひ体験してもらいたいと思い、大阪のちんどん通信社さんに、展覧会の宣伝を各所で行ってもらいました。ちんどん屋が商店街やアーケードなどを歩くと、行き交う人々はほぼ必ず振り返り、じっと眺めています。そして、ちんどん屋から受け取ったチラシを真剣に眺めています。もちろん宣伝のためにちんどん屋は街を歩くのですが、ちんどん屋に出会った人々は嬉しそうにされています。ちんどん屋が街を歩く時の工夫の賜物ではありますが、ちんどん屋の持つ不思議な魅力のひとつが表れているといえるでしょう。一度の宣伝活動で配れるチラシはそれほど多くはないのですが、マス広告とは異なる効果があると考えられます。

展覧会でもご紹介し、また街中で宣伝を行ってもらったように、令和の現代でもちんどん屋は活躍しています。その不思議な魅力と特別な効果は現代だからこそ新しい可能性を示してくれているのではないのでしょうか。ちん



展覧会の宣伝の様子（ちんどん通信社）

どん屋は、決して郷愁の中に取り残されているのではなく、今日もどこかで様々な芸を駆使して街を歩いています。ご興味を持たれた方は、ぜひちんどん屋をご自身の街に招いてみていただけたらと思います。（山崎達哉）

会期：令和5年10月25日(水)～令和6年2月17日(土)

会場：大阪大学会館 待兼山修学館 3F 多目的室

主催：大阪大学総合学術博物館・大阪大学中之島芸術センター

協力：大阪大学大学院人文学研究科・ちんどん通信社（有）東西屋

第18回特別展「豊中市所蔵 京・大坂 日本絵画の精華 ～花鳥画の名品から俳画の珍品まで～」

大阪大学中之島芸術センター展示室と豊中市立文化芸術センター特別展示室で、豊中市が所蔵する日本絵画の展覧会（会期：2023年10月14日～同年11月19日）を開催しました。これらのコレクションは、2021年に大阪大学総合学術博物館が豊中市より寄託を受け、博物館とともに本学人文学研究科の教員・学生が調査研究を進めてきました。調査の結果、大坂画壇の画家によるもの、詩文を伴うもの、軽妙で洒落た趣のものを多く含むという特徴が明らかになりました。展覧会では前期・後期で50点を展示し、ミュージアムレクチャーやギャラリートークも開催しました。さらに、絵画作品54点を



会場の様子



豊中会場のギャラリートークの様子

掲載するリーフレットを作成し会場で無料配布およびHP上で公開しました。展覧会に足をお運びいただいた皆様、ご関係者のみなさまに心より御礼を申し上げます。

当館ではこれからも地域と連携した研究に力を入れ、歴史豊かな豊中市および府内の美術作品について積極的に発掘し再評価に努めていきます。(波瀬山祥子)

会期：令和5年10月14日(土)～11月19日(日)
会場：大阪大学中之島芸術センター展示室・豊中市立文化芸術センター特別展示室
主催：大阪大学総合学術博物館・大阪大学中之島芸術センター・豊中市
協力：大阪大学大学院人文学研究科

豊中市立郷土資料館 巡回展「庄内式土器」

令和6年(2024)1月8日から26日まで、大阪大学会館3階の歴史展示室において豊中市立郷土資料館開館1周年記念事業 巡回展「庄内式土器～豊中で発見された卑弥呼の時代の土器～」が開催されました。

本展覧会は豊中市立郷土資料館の開館1周年を記念して令和5年(2023)10月から12月に開催された同タイトルの特別展を豊中市と連携協力関係にある大阪大学においても巡回展として、学生や教職員また豊中市北部の市民向けに開催されたものです。

庄内式土器は現在の豊中市庄内にあった庄内尋常小学校の建設用地で発見されたもので、弥生時代から古墳時代へ移り変わる時期、「卑弥呼の時代」の土器であることが判明し、見つかった場所にちなんで「庄内式土器」



会場の様子

と呼ばれるようになったものです。

考古学上の年代をはかる重要なものさしの一つとなった、庄内式土器の発見から研究の流れや、豊中との関係について、また庄内式土器そのものの特徴や生活スタイルの変化、土器が使用された時代背景などについて、他の地域の状況も交えて紹介されました。

会期：令和6年1月8日(月・祝)～1月26日(金)
会場：大阪大学会館3F 歴史展示室
主催：豊中市立郷土資料館
共催：大阪大学総合学術博物館・大阪大学埋蔵文化財調査室

豊中市立学校理科展 サテライト展示

大阪大学総合学術博物館では、豊中市立学校理科展に出品された児童・生徒の自由研究作品の中で特に優秀な作品を選び、表彰をしています。令和5年度は豊中市立学校理科展に出品された計162点の作品から選ばれた優秀作品12点を大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館で展示しました。当館からの表彰以外にも大阪府学生科学賞 最優秀作品 大阪市長賞を受賞した作品もあり、どの作品も見応えのあるものばかりでした。(辻野博文)

会期：令和5年12月9日(土)～12月16日(土)
会場：大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館 3F セミナー室
主催：大阪大学総合学術博物館
共催：豊中市教育委員会・豊中市教育センター
後援：豊中市



会場の様子

私にもできるアウトリーチ

大阪大学総合学術博物館を、大阪大学の研究者の皆様のアウトリーチの場として活用してみませんか？簡単な

ところでは、サイエンスカフェ等のコーディネーターから、特別展まで、いろいろな規模のアウトリーチ等が可能です。まずは総合学術博物館までお気軽にご相談ください。

kyousou-museum-tekijuku@office.osaka-u.ac.jp

第5回兼任教員コラム

博物館は各研究科の先生方に兼任教員をして頂いています。このコーナーでは兼任教員の方の活動をご紹介します。

上田 貴洋（うえだ たかひろ）

大阪大学大学院理学研究科化学専攻 教授

2002年の総合学術博物館の創設から昨年3月まで、足掛け20年を総合学術博物館の専任教員としてお世話になった。今回、本コラムを執筆する機会をいただいたので、専任教員として眺めてきた景色の一端を綴りたい。

大学博物館が果たす機能と役割は、一般の博物館とはやや趣を異にする。1996年に学術審議会 学術情報資料分科会 学術資料部会から出された答申「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）」によれば、『ミュージアムとは、大学において収集・生成された有形の学術標本を整理、保存し、公開・展示し、その情報を提供するとともに、これらの学術標本を対象に組織的に独自の研究・教育を行い、学術研究と高等教育に資することを目的とした施設である。加えて、「社会に開かれた大学」の窓口として展示や講演会等を通じ、人々の多様な学習ニーズにこたえることができる施設でもある。』とある。つまり、大学博物館は、本学で研究するすべての教職員、大学院生・学生が生み出す研究成果に基づく学術資料を整理・保存、公開・展示するだけでなく、独自の研究・教育を行うことが求められる。当初、私は博物館が所蔵する学術資料を用い、自らの専門である物理化学的手法を駆使した研究にトライをした。しかし、もともと博物館の素人にはその敷居は高く、残念ながら学会発表ができるような成果には至らなかった。一方、「社会に開かれた大学」の窓口をプロデュースすることは可能であった。現在も開催されているサイエンスカフェや体験こどもミュージアムがそれである。これまでに多くの方に参加いただき好評を博している。2008

年から続いている「サイエンスカフェ@待兼山」は、本学のアウトリーチ活動の草分けであり、今年度で177タイトルを数えている。

さて、総合学術博物館が大学博物館の更なる発展には、何が必要であろうか。それには、適材適所の人材活用に他ならない。先の答申には、ユニバーシティ・ミュージアム整備の基本的な考え方についても触れられている。その中で、『ミュージアムを研究・教育に資する施設として有効かつ効率的に運営するためには、少なくとも当該ミュージアムの中核を形成する学術標本の研究者を専任として配置する必要がある。』と述べている。あくまで個人的な意見であるが、総合学術博物館に所蔵されている学術標本を専門とする（学術標本で飯が食える）研究者を配置し、それらを用いた研究・教育を展開できる体制を整えていくことが必要であろう。また、学術標本の整理・保存・管理・公開に携わる専従の職員を配置する必要性も謳われている。博物館プロパーな教員の配置も忘れてはならない。しかし、数少ない専任教員では、大阪大学の幅広い学問領域を網羅するのは土台無理がある。そこで、総合学術博物館では、兼任教員が配置され、学内の学術資料や研究成果について、有形学術資料となり得るかどうかの判断や、各局と博物館との連絡調整の役割を担っていただいている。これは先の答申でも学内研究者の併任制度の他に、退職者や学外研究者の客員制度、ボランティア制度などの活用が謳われている。総合学術博物館により適した形で兼任教員制度が運用できるよう、更なる充実と活性化が望まれるところである。

2023年、ミュージアムリンクスが設立され、総合学術博物館の更なる機能強化が求められるようになった。これを機に、私はもともとのお古であった理学研究科に異動となった。これまで、専任教員として眺めていた景色が一変し、博物館を客観的に眺めることができるようになった。今後は、兼任教員の1年生として、これからの総合学術博物館を盛り上げていくため、何ができるか模索するところから始めたいと思う。まずは、専任教員として過ごした約20年間にお世話になったすべての皆様への感謝をもって、本コラムの結びとしたい。

編集後記

令和6年度春開催の展覧会は、今年度設立されたミュージアム・リンクスと、微生物病研究所等の学内連携の一環として開催されます。アウトリーチでお困りの際には、大阪大学と社会をつなぐ窓口としての当館までご相談ください。（辻野）

大阪大学総合学術博物館ニュースレター
まちかねミュージアム

発行日 2024年3月8日

編集発行 大阪大学総合学術博物館

グローバル情報委員会

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町1-20

大阪大学総合学術博物館 事務局

Tel: 06-6850-6284

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/>